

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

提灯に灯る祖母の想い

千葉県 鎌ヶ谷市立第五中学校 三学年

井上 里虹

八月。今年もお盆の時期が訪れ、家の和室には真菰とお線香の馨香が漂っていた。心安らぐけれど、どこか愁いを感じさせる匂い。我が家では毎年のこの時期になると、お供えものをして、亡くなった祖父を供養している。

祖父は、五十三歳という若さでこの世を去った。そんな祖父の仏壇に供えられた花を、祖母は毎日水を替え、丁寧に面倒を見ている。祖母は、祖父について自らはあまり語ろうとはしない。だけど、仏壇を優しく微笑みながら手入れしたり、祖父の写真を大事に保管しているところを見ると、『すごく愛していたんだろうなあ』と思う。

少し前に、単身赴任している父が一日だけ帰ってきた。祖母は、一人息子である父を嬉しそうに迎えた。久しぶりに父に会い、会話が弾んでいた時、祖母が突然父に問いかけた。

「あんた、今何歳？」

父が不思議そうな表情を浮かべつつ、

「今年で五十五だよ。」

と答える。

「じゃあ、お父さんより長く生きてるのね。」

祖母が祖父の遺影を眺めながら言った。きつと、心嬉しかったのだろう。

父は、五年前にガンを発症し、手術を受けていた。祖母は誰よりも父を心配し、不安でたまらなかったのだと思う。でも、父は祖父が亡くなった後に、いつ、どんなことが起きてもいいようにと「生命保険」に加入していた。だから、金銭面ではあまり負担をかけずに済んだ。しかし、今でも数カ月一度病院に行き、検査を受けている。

「何の異常もなかったよ。」

という父の声を聴くだけで、私たちはもちろん、祖母もとても安心する。

“生命保険”は、亡くなった時に支えてくれるだけでなく、病気になるった時や、退院後の治療費までサポートしてくれる。金銭面で、

第55回中学生作文コンクール

少しでも家族の不安を安心に変えてくれる“生命保険”は、少子高齢化社会となった今、最も人々が必要とするものなのではないだろうか。私自身も、いずれは両親を支えていかなければならない存在となる。だからこそ、もし自分の身に何か起きた時、少しでも家族への負担を減らせるよう、早いうちに“生命保険”に加入しておこうと思う。“何か起きてからでは遅い”それは、これからの社会を担う者も、今担っている者も、全員が胸に留めておかなければならないことだろう。

お盆も最終日を迎え、提灯の明かりに灯された祖父を、祖母があたたかく見守る。私は、『家族がこれからも長生きでいられますように』と願いを込めて、祖父を、ほのかに赤く染まった天国の空へ送った。

ずっと消えた明かりが、願いを叶えてくれていたようだった。